



小松甲川《ぼたん図》(双幅) 明治25年

《表紙解説》 小松甲川《ぼたん図》双幅 明治25(1892)年 紙本墨画着色 各124.7×50.7cm

小松甲川(本名文雄、1857~1938)は、薩摩藩最後の御用絵師である佐多椿齋(1817~1891)の三男として、現在の鹿児島市に生まれた。椿齋は薩摩画壇で多くの弟子を擁した馬場伊歳(木挽町狩野家の伊川院栄信門人、1783~1854)に学んでいる。世が世であれば、甲川は父の跡を継ぐ絵師として活躍したかもしれないが、11歳の時に明治維新がおこり、幕府や藩の後ろ盾を失った狩野派の絵師たちの境遇は大きく変わっていった。

父から絵を学ぶと共に漢学や書も修めた甲川は鹿児島で教職に就いた後に上京し、椿齋と同門の柳田龍雪(当時は紙幣寮石版科長、1833~1882)から学んで明治15年には第1回内国絵画共進会に2点の日本画を出品。その後、外務省や警視庁に勤務し、明治21年には内閣総理大臣黒田清隆秘書官の牧野伸顕(大久保利通二男、1861~1949)付きとなる。鹿児島の人脉を頼りに政官界で活路を探るが、明治23年の第3回内国勸業博覧会に日本画と篆刻印を出品する

など、絵画への思いは抱き続けていた。同年には帰郷して鹿児島県職員となり、5年後の明治28年、38歳にして県尋常中学校(後の第一中学校)教員となる。教職に就いたのは、作画活動も続けられる堅実な選択であっただろう。明治41年には県立第一高等女学校(後の鶴丸高校)教諭となり、74歳で退職するまで美術と書を教えた。

甲川の活動は美術教育はもとより、制作面でも絵画、書、篆刻など幅広い。現在、鹿児島県内にある木村探元や小松帯刀など先人の頌徳碑や記念碑、さらに墓石の文字に至るまで甲川の手掛けたものは数多くあり、当時はむしろ書家としてのイメージが強かったかもしれない。

本作品は帰郷して2年目、明治25年の制作になる。茎の表現に狩野派の筆法が見られるが、赤、白、黄、薄紅色の牡丹の大輪と蕾、そして数匹の蝶が舞う様子は、むしろ円山四条派などの写生派ふうの描写である。平明温雅な画風からは甲川の人柄が感じられる。

## contents

- 調査メモ①  
鹿児島絵図(文政前後)(写)について
- 調査メモ②  
藤島武二の帰郷と15歳時の写真
- Topic : 新ライブラリーのご活用を!
- 表紙の作品解説